

第3回千葉市新庁舎整備シンポジウム議事録

第1部

登壇者

1 基本設計者

伊藤 彰彦 氏 (株式会社 久米設計)

服部 一晃 氏 (隈研吾建築都市設計事務所)

2 千葉市本庁舎整備検討委員会 元委員

柳澤 要 氏 (千葉大学大学院 教授) *ファシリテーター

指田 朝久 氏 (立教大学大学院 特任教授)

近江 哲也 氏 (合同会社 共有価値計画 代表)

大槻 勝三 氏 (緑区町内自治会連絡協議会 会長)

菅野 昭子 氏 (市民公募委員)

柳澤氏： 千葉市本庁舎整備検討委員会¹ (以下、「検討委員会」) では、「市民に開かれた市庁舎、市役所に用事がない人も気軽に立ち寄ることができる庁舎」を目指して議論をしてきた。そして、モノレール駅からのアクセス性、臨港プロムナードやみなと公園との関係性なども考慮しながら、新庁舎の配置についても検討を重ねた。その際、既存の庁舎を活用しながら新庁舎を建設できるL字型の建物配置が一つの解ではないか、との結論に達したことから「基本設計方針」として提示してきた経緯がある。基本設計においては、その意図を汲んで具体的な検討を進め、様々なアイデアを設計に反映してもらったと思う。

先ほどの基本設計者の説明と繰り返しになる部分があるかもしれないが、このような経緯を踏まえた上で、来庁者のアプローチ・動線と主に来庁者が利用する部分をどのように計画したか、詳しく聞きたい。また、プロムナード・テラス・まちかど広場など複層的に様々な開放スペースを提案いただいているので、詳しくお聞かせ願いたい。

伊藤氏： 本庁舎の敷地は、インフラ関連企業の集積に加えて千葉駅からポートタワーに繋がる臨港プロムナードに面する立地であり、周辺には緑地も充実している印象があったが、緑地が活きているという感覚をあまり感じるができなかった。そこで、検討委員会の議論であった「市民に開かれた市庁舎、市役所に用事がない人も気軽に立ち寄ることができる庁舎」という観点から、L字型の建物配置を活かした「みなとの縁側」を提案した。

本庁舎敷地は埋立て地に立地しているが、この周辺のエリアは、埋め立て前には海岸線があり、海の家が並ぶ風景が広がっていて、オフシーズンでも人が集まる地域のコミュニティの場が形成されていたと聞いている。今回提案した「みなとの縁側」は、現代の海の家として、千葉市の新しいコミュニティの場になって欲しいと考えている。

「みなとの縁側」では、建物の内部と外部を一体的に利用できるように配慮し、この場所での市民の様々な活動自体が風景になる様な空間づくりを心掛けている。また、みなと

¹千葉市本庁舎整備検討委員会…平成26年度から2年間にわたり、本庁舎整備に関する事項について調査や審議を行った。

公園の緑と新庁舎敷地の緑の連続性を活かし、まちと人、庁舎、緑を繋げたいと考えている。この様な観点に立つと、新庁舎に計画されているカフェの存在が重要になってくる。連続する緑の中にカフェがあれば、市役所に用事が無い人も散歩の途中に気楽に立ち寄ることができ、これをきっかけに千葉市の様々な情報に触れてもらうことも出来る。

柳澤氏： 本庁舎には、ほとんど来庁者のない執務ゾーンと来庁者の多い執務ゾーンがある。また、来庁者の多い部分でも、事業者が比較的多く来庁する窓口と一般市民がよく利用する窓口などが混在している。検討委員会では、来庁者がほとんどない部分をバックオフィス、来庁者が多い部分をフロントオフィスに区分し、新庁舎のあり方を議論してきた。

性格が異なる執務室が混在する中で、セキュリティと来庁者への開放性の確保を両立していくためにはゾーニングの考え方が難しいと思われるが、その考え方について、説明をお願いしたい。

伊藤氏： 1・2階の市民利用の部分为例にすると、多くの市民の方々に使っていただくためにはセキュリティの考え方が非常に重要となる。不特定多数の利用者を想定した建物であるため、開庁時に1・2階を開放することに問題はない。しかし、土日を含めた閉庁時の市民利用をどのように想定するかについては結論が出ていないため、セキュリティエリアに至る通路に扉を設置することによりセキュリティ区画を形成することで、どのような運用にも対応が可能となるようにしている。例えば、休日等の閉庁時、会議室までは自由に行けても、その先には施錠された扉があり、立ち入りができないような計画としている。

柳澤氏： 新庁舎においては、ハード（建物）とソフト（運用）の連携が重要になってくると言える。

まちづくりをご専門とされている近江さんに、これまでの経験を踏まえ、1・2階の市民利用部分の運営を成功させるポイントは何か、という視点からご意見・ご質問をお願いしたい。

近江氏： 最近のまちづくり・エリアマネジメントの議論においても、防災の性能を向上させるためには、ハードに加えてソフトの重要性が指摘されている。そのエリアに所属する企業の間で、普段から顔の見える関係をつくっておくことが大切であり、そのような活動を通じて面としてのレジリエンス性（強靱性）を高めることが必要。このような「日頃から周辺の企業・団体等と運用面での連携を図ることが大事」という話は、検討委員会や第2回シンポジウムでも議論してきた。

周辺企業・団体等との意見交換・パネルディスカッションを経て、様々な意見を伺いながら設計を進めてきたと思うが、その辺りの、運用面を含めた顔の見える関係性づくりを基本設計にどのように活かしてきたのか、設計者から伺いたい。

服部氏： 第2回シンポジウムに出席して下さった企業を中核メンバーとする「周辺の企業・団体等の方々との意見交換会」を開催する段階を経て、そこでの議論内容を基本設計に反映させている。本庁舎が立地する場所の周辺には、通信・インフラ・医療等に関わる企業・団体が集積している。この点をふまえ、意見交換会では、1・2階をただ商業的な賑わいのある場所にするのではなく、防災、災害発生時に連携して情報を発信していくための場所であるということを確認にした。その上で、いかにそれを日常的に賑わいへ変化させてい

けるか、という点が重要であることを中心にディスカッションを重ねてきた。

「1・2階の整備イメージ」として、配布した資料に示されている様に、様々な場所を計画している。これらの場所は、例えば帰宅困難者の一時受け入れや炊き出しにも対応可能である。また、1階が浸水で駄目になった場合も2階以上が活用可能となるなど、非常時における利用にも配慮された場所になっている。

これらの空間は、日常的には周辺企業・団体等との共同防災訓練等の活動・イベントに使えるスペースになるなど、通常時から非常時の活動が可視化できるように配慮して場所づくりを行った。

近江氏： 基本設計の段階で、細かい活動のイメージが出来ているという点は、通常の市役所の設計にはないことだと感じている。

1・2階はいろんな活動ができる場所となっているが、現時点ではどのような運用を想定しているのか。また、この空間の利用推進団体の設置などについても考えているのか。

服部氏： この点は、これから検討し発展させていくべきところだと思う。基本設計で検討した大きな屋根つきのスペースは、非常時に活用可能であるし、また情報ステーションでは、通常時から情報を発信可能になっている。ここには「防災」という前提があるので、今後は運営サイドが、これらを活かす形で発展させていってほしい。

近江氏： 今後いろいろなメニューが用意されることとなると思う。ただ、最初から全部を用意することはできないので、まずは共同の防災訓練・物流といった点で周辺の企業・団体と連携するなど小さなところから始め、時間をかけて徐々に組織化を図っていく過程で、新たなルール作りを伴っていくような進め方が必要になるのではないかと。

柳澤氏： いま「1・2階の非常時の利用」の話が出された。検討委員会でも、市役所を日常的な居場所にしていきたいとの議論があった一方で、政令指定都市の本庁舎なので、非常時には司令塔として機能する必要があるという観点からも十分に議論をしてきた。

この経緯をふまえ、非常時にどうするかという点も含めて、防災のご専門の指田先生からご意見ご質問をお願いしたい。

指田氏： 昨年度の熊本地震では、5つの自治体の市庁舎が被災し、市民への「り災証明」の発行が遅れるなどの影響が出たという。千葉市の現庁舎においても、耐震性の問題があるということで、災害への対応が大きなテーマであると言える。非常時における業務継続計画は、①被災しないようにする、②万が一被災した際にどう対応するか、③政令指定都市の指揮命令系統の発揮など、いろいろな課題があると思われる。

これらの課題に対してそれぞれ、①地震と高潮に対しての備え、②被災したときのライフラインの備え、③指揮命令系統としての災害対策本部の考え方や情報発信空間をどのように設定したかについてご教示願いたい。

伊藤氏： ①地震に対しては、建物の揺れを抑えて建物が壊れないようにすることは当たり前だが、内装や家具も転倒せず全体として機能維持できることを目指し計画を行った。高潮に関しては、想定外の想定ではあるが、モノレールデッキの2階レベルより上に主な防災機能を配置している。モノレールデッキは5 m以上の高さになるため、かなり万全な体制ではないかと考えている。

②被災した場合の対応について。先ほどの説明では、環境配慮と業務継続計画をまとめて説明をしたが、実は2つはつながっている。環境配慮がなされた建物はエネルギーを極力使わずに済むことから、非常時においても建物を長く機能させることができる。この様に考えると、自然採光・自然通風や断熱材の強化などという環境配慮が、通常時だけでなく非常時にも役立つと考えている。エネルギーに関しても72時間は単に3日というわけではなく、量を絞って使う、場所を限定して使うといった運用次第で1週間持たせることも可能になる。非常時における運用の細部については、今後市側に検討してもらいたい。また非常用発電以外にも太陽光発電もあるし、トイレの洗浄水として使用できる雨水利用といったライフラインを確保している。

最後に③指揮命令のため、2階以上のフロアに市長室や危機管理関連部署を適宜配置している。具体的には、2階に中央監視室、すぐ上の3階には危機管理センターを設置している。危機管理センターについて、通常時は会議室として使用でき、非常時は市の意思決定の中核となる。また、その上の4階には市長室やその関連諸室を配置した。

指田氏： 1階部分が高潮等で被災した場合を想定し、2階以上に機能配置しているのは良い点だと評価できる。

万一被災した時には、NPO・消防・自衛隊など庁外組織との連携が必要になり、そのための空間が必要となる。外部や内部の空間を計画するにあたり、非常時への配慮をした箇所があれば、具体的に説明をお願いしたい。

伊藤氏： 非常時に、1・2階において帰宅困難者の受入れや災害情報の受け取りを行うということは既に述べた。これに加えて、この2層の吹き抜け空間は視認性がよく、どこに何があるかがわかりやすい。また、通常時には市政情報を映すモニターが、非常時には災害情報を映し出すので、「どこでなにが行われているか」などが一目瞭然で確認できるように配慮されている。

建物内部だけでなく、駐車場も災害発生時には重要な場所となる。このため、来庁者用駐車スペースには、あえて車止めを設けず、駐車場を活用して様々な災害対応が行えるように配慮している。また、主要な部分のみではあるが、地震で液状化しないよう地盤改良を行う計画になっている。

指田氏： ソフトの部分については今後作りこんでいく必要がある。また、情報発信という面では多国語発信ということも検討する必要があることを指摘しておく。それを妨げない設計になっている。

柳澤氏： 検討委員会の議論でも、通常時から本庁舎に人が集い、日頃から情報発信していくことが非常時の情報発信にも機能するという議論を重ねてきた。続いて、市民公募委員の菅野さんからご意見をいただきたい。

菅野氏： 本日の基本設計者からの説明やパースによる新庁舎のイメージを拝見して、新庁舎に、明るい印象、そして新しい印象を持つとともに、自分たちのための庁舎だと感じた。今までの本庁舎よりも情報の発信や提供機能を充実させていくことが必要だと感じている。

用事がない人も気軽に立ち寄れる庁舎という話が出ていたが、ただ散歩でくるのではなく、「情報」というお土産を持って帰れるような工夫はあるか。

服部氏： 政令指定都市なので一般的な市民サービスは区役所で行っているため、新庁舎の情報コーナーを目当てにくる人はあまりいないと推測される。しかし、1階であればカフェやイベントスペース、2階であれば食堂があり、これらが普段はにぎわい創出の場所となる。これらの施設を目的として訪れた市民が、たまたま情報に触れていくという流れで市政情報や防災情報を日常生活に自然に取り入れられるような1・2階の機能配置にした。

非常時をイメージして色々なスペースを設けている。例えば食堂では「千葉市の産品を活かしたメニュー提供を行う」だけではなく県内他市や福島や熊本といった被災地との連携でその産地の食材を使ったイベントなどを通して防災について考え直すということも想定できる。イベントスペース、カフェもそのような利用を普段からすることで+αで持ち帰られるという設計を目指した。

菅野氏： イベントの中身の検討など、今後の運用が重要になってくる。

もう一点。とても明るい新庁舎だが、ガラス張りは強度の面で、非常時に耐えられるのか。

伊藤氏： 新庁舎は高層棟と低層棟に分かれている。高層棟は執務室ということで、光を入れるためのガラス面はそれほど多くない。一方、低層棟はまちに対して開いていきたいという観点から比較的大きめのガラスを使用している。

免震構造を採用しているので、サッシの揺れそのものが少ない。また、既成のサッシは東日本大震災でも壊れたという報告はなかったと記憶している。

実施設計以降、強度を上げるためにガラスにフィルムを貼るなどの検討は必要と考える。

柳澤氏： 本庁舎敷地は、あまり便利な場所には立地していないが、デザイン的に人を惹きつける工夫、わざわざ訪れたいような工夫は施されているか。隈研吾建築都市設計事務所は木を使ったユニークなカフェなどの作品があるが、そのようなこだわりについて伺いたい。

服部氏： 千葉駅前などの商業的な賑やかさとは別種の賑わいを設けたかった。みなと公園や臨港プロムナードは、駅前では得られない緑地空間が充実している。この緑地を活かすことを意識し、1・2階の空間室内やファサード（建物の正面部分）に取り込んでいく。具体的には1・2階に重点的に天然木を使用し、柔らかい雰囲気落ち着いた空間を演出した。

柳澤氏： 検討委員会においても、千葉市のアイデンティティを考えて、「緑」が一つ大きなキーワードになるであろうという結論にいたった。大槻さんからは何かあるか。

大槻氏： 基本設計者から木材利用について説明があったが、自然エネルギーを活用するためにも是非とも木材利用を促進してほしい。木材は自然に優しいイメージがあるので、本庁舎から発信できるようにしてほしい。

コストについて、私たちが検討を行っていた基本計画時は事業費の総額が298億円だったが、今回は307億円となっている。増額の理由を聞きたい。

千葉市（資産経営部長）： 資料の一番後ろに概算事業費を記載している。平成27年度の基本計画策定時の積算は、基本設計のように具体的に図面を検討したわけではなく、想定する面積に当時の平米単価をかけて仮試算したものである。基本設計にあたり、具体的な性能を想定した上で実際に図面を検討し、また様々な設備等についても検討を行った上で、建設工事費等を積算した。

この結果、新庁舎の建物本体に要する費用は、若干の増額はあるものの、基本計画とほ

ほぼ同じ金額が算出されている。主な増加要因としては、外構工事や解体工事など、建物本体以外に関わる部分であり、基本設計をやって初めて詳細がわかった。

大槻氏： 新庁舎のランニングコストは、現在の庁舎と比較してどのように見込んでいるのか。

千葉市： 現庁舎は老朽化しており、加えて3カ所に分散化していることから、清掃や点検などの費用や光熱水費に約6億6,000万円かかっている。新庁舎では、省エネ性能の高い建物となり、設備も新しくなること、執務室もひとつの建物に集約されるため、およそ2/3の約4億円となる見通しである。

柳澤氏： ランニングコストの話があったが、インシヤルを抑えても維持管理が高くなると意味がない。長い目で見ても効果的な庁舎を建設する必要がある。設計者から見て、ランニングコストについて工夫された技術、デザイン等あれば教えてほしい。

伊藤氏： 職員の執務が中心になる高層棟と、来庁者の多い低層棟とで設えを変えている。

高層棟は機能を最優先し、質実剛健なイメージである。ガラス面を少なくすることに加えて、ガラス面を外壁面から奥まった場所に配置して雨掛かり少なくしている。また、片引き窓で中から清掃可能なようにするなどメンテナンスのしやすさに配慮している。

また低層棟についても、メンテナンスをしやすいよう壁面緑化を絡めた外部デッキを設けている。

柳澤氏： 他に何か意見はあるか。

近江氏： 土日・夜間にシンポジウムやセミナーを開催する場合、市庁舎の行政サービス空間と市民利用の空間が一緒になって使いづらいことが多いが、今回の基本設計を見ると、セキュリティの切り分けがあるので使いやすい印象がある。もう少し解説していただきたい。

服部氏： 最近の庁舎は様々なイベントを開催するためにそのためのスペースを設けるのが基本的な考えとなっているが、執務部分と一体的に計画されてしまい閉庁時に利用できないことが多々ある。今回は執務室と区切っているため、仮に1・2階を24時間利用するような運営となっても支障がないように明確にゾーニングをした。

柳澤氏： この基本設計で用意されたスペースを活かすためにはどのような運用をしていくべきか、市側で今後の検討が必要になる。アオーレ長岡²では、市民協働スペースの運用を市民団体が市と協働しながら運営している。今後、千葉市において、そういう組織をいかに作られるか、ハードを活かすためのソフトが求められるように感じる。

一方で、政令指定都市の本庁舎であるため、セキュリティを守りながら市民スペースと執務スペースをいかに切り替えるかということも重要な課題である。

最後に、通常時と非常時という観点から、普段から親しんでいる庁舎でないと非常時に機能しないということが言える。役所に用事がなくてもふらっと庁舎に来たくなるような魅力があり、憩いの場となるよう、今後はソフトを整備していくことが重要である。

そして、災害が発生した時には、災害の拠点にスムーズに移行することが重要だと感じる。

これにて第1部を終えたい。

² アオーレ長岡…市役所と同じ敷地内にアリーナや屋根付き広場（「ナカドマ」）を擁し、市民交流の拠点となっている。

第3回千葉市新庁舎整備シンポジウム議事録

第2部

登壇者 熊谷 俊人 千葉市長
隈 研吾 氏 東京大学 教授（以下、「隈 教授」。）
山田 幸夫 氏 株式会社 久米設計 会長（以下、「山田会長」。）
柳澤 要 氏 千葉大学大学院 教授 *質疑応答時進行

熊谷市長： 改めて、本日は多くの方にご参加いただいたことにお礼を申し上げたい。

いよいよ本市の基本設計が佳境を迎えた。庁舎は市民のためのものであるため、ひとりでも多くの方に関心を持っていただきたいと感じている。市で実施する様々な事業について、検討の途中でシンポジウムを行っても市民参加が少なく、検討が終わったあとに発表すると、「どうしてこのような結果になったのか」という意見をいただきがちである。

このように事前に市の考えを示し、市民の皆様からご意見をいただき、納得を得たうえで、事業を進めていきたいと考えている。庁舎整備については千葉市議会でも多くの議論を行っているので注目していただきたい。

隈教授、山田会長とは今年2月に開催した第2回新庁舎整備シンポジウムでも対談させていただいた。そのときはこれから基本設計に着手するにあたって市の想いを伝える場として開催し、市民の皆様はその様子をご覧いただいた。そこでの議論を踏まえて基本設計の検討を重ね、本日その成果を説明するに至った。

第1部を拝見していたが、登壇者から様々な方面に対して質問があり、設計内容をかなり深掘りできたのではないかと感じている。

その上で、お二人にはこの事業を通して感じたことについて改めてお聞かせ願いたい。建物単体に関することでも、千葉みなとなどの庁舎周辺地域を含めた事業全体に関することでも構わない。

隈教授： 千葉市庁舎は、「まち」と「みなと」をつなぐ軸、それに交差する軸の角に立地している。この2つの軸を活性化させるために、また、千葉市の都市イメージをブランディングしていくために非常に重要な場所に立地していると感じた。

また、2011年の東日本大震災以降、日本の関心は確実に防災に向いていると言える。防災の面から考えても、千葉市庁舎の周辺には防災に強いチームを作るのに最適な企業が多く集積している。インフラ関係、通信関係などの企業と連携することにより他の市庁舎にはできないような最強のチームができるのではないかと。

熊谷市長： 市庁舎の周りにこのような企業が連なるのもなかなか例がない。

また、2つの軸についてご指摘があったが、今年千葉駅が建て替わり、千葉駅周辺エリアと千葉みなとをつなぐ軸が大きく見えてきた段階にある。そこにフォーカスしていただきありがたく思う。

続いて山田会長からご意見をいただきたい。

山田会長： 当社は今年創業85年を迎え、これまで様々な設計をしてきたが、その中でも庁舎の役割は大きく様変わりしてきたように感じる。

隈教授の発言にあった防災についての関心もそうだが、(庁舎は)「城」のような機能を持ち始めた。戦国時代における「城」は、平時は国を治める場所として存在するが、戦いが始まると、そこは最後の砦となり、戦力を温存させる場所、怪我をさせない場所としての機能を持つようになる。

話を現代に置き換えると、例えば病院の場合、建物の天井が落下し、医療従事者が怪我をした場合、何十人という患者の対応が難しくなる。これは市庁舎についても言えることで、職員をどれだけ温存できるかということが大きな課題である。

「庁舎内の機能を守る」「省エネに配慮した建物を作る」という考えはもちろん根底にあるが、「いかに庁舎にいる職員を守るか」ということは、「いかに市民に行政サービスを行えるか」ということに直結するように感じる。その観点から考えると、千葉市の新庁舎は耐震性や省エネ性、利便性にも優れており日本で最新の庁舎設計がなされている。

建物として最新の物を作ったとしても、「通常時にどのように使うか」「非常時にどのように使うか」という運用面に関して、詰めて検討しておくことが今後大切になる。

熊谷市長： ご指摘にあったように、通常時・非常時(にどのように使うか、という運用)を意識し、同じ建物内でどのようにスムーズにスライドさせていくか(という運用面について)検討することは重要だと感じている。設計者として想いを込めて設計をしていただいたことが伺えた。

では、使う側(ユーザー)に対してどのような使い方を期待しているか。

山田会長： 静岡県で市民病院を建てた際、設計の段階から、医師らから「どう設計してほしいか」というハード(建物)に関する要望を聴取するだけでなく、「(竣工後、病院を)どう使っていきたいか」というソフト(運用)面について共に検討をし、設計を進めた。

「こう使いたい」というユーザーの「判断」の積み重ねによって設計者は自信を持った設計ができる。

市庁舎を日常的に使用するのは市長や市の職員であるため、建物の使い方を市長や職員で共有したうえで、各々が市民に対してどのようなサービス精神を持つかによって、この建物の市庁舎としての機能が見えてくるのではないかと期待している。

熊谷市長： ご指摘いただいた点は非常に重要な視点だと感じる。来庁者が多く窓口業務がメインとなる低層棟と来庁者がほとんどない執務中心の高層棟は、その業務特性からある程度分類することが可能である。低層棟は市民にサービス提供をしたり、交流をしたりする貴重なエリアになると思う。

(隈教授のご指摘にあった)交差点として、低層棟がどのように役割を果たしていくか、また職員の意識をいかに高められるか、という課題がある。

これから市が意識すべきことについて隈教授にご発言いただきたい。

隈教授： 千葉市庁舎は千葉駅からの延長線上に立地していることがアドバンテージである。さらに市庁舎の前面には大きな外部空間が広がっている。

これまで長岡市³や豊島区などを手がけてきたが、千葉市庁舎のようなインフラ企業と近接した市役所は例がないため、どう使いこなしていくかが肝となる。

今後重要となるのはまさに「使い方」の部分である。これについては市職員全体が団結して考えてほしい。大きなガラス張りで外部と連続していて、また、1・2階は吹き抜けにより連続した空間になっており、いろんな使い方の可能性がある。これらの要素がうまく絡み合うと、全国の中でもモデルケースになるのでは。

どの自治体でも、庁舎建替えとなった場合には財政局の中に建替えのための準備室ができ、そこが担当となる。しかし、千葉市庁舎は都市計画、まちづくりの観点でも千葉駅と千葉港をつなぐ重要な場所に立地しているため、現在の財政局だけでなく、都市部局にも積極的に参加してほしい。

さらに、観光に関する部局や防災に関する部局、すべてが団結してこの大きな透明な箱について考えたとき、運用が見えてくる。

第1部にて、長岡市役所ではNPO法人など、市の職員以外の方も市役所の使い方を検討しているという話が出たが、実際にかんがりの盛り上がりを見せている。今日のようなシンポジウムを開催することによって、市民の皆様の関心が高まり、職員のモチベーションとうまく連動させることができるのではないかと。

熊谷市長： これまで、庁舎整備は財政局の庁舎整備室が中心となって取り組んできた。

今後は、福祉であったり市民活動であったり様々な事業を所管する部局が、「庁舎整備事業は自分のプロジェクトだ。」という意識を持ち、どのように市庁舎に魂を入れていくかという議論をしていく必要がある。全庁的にチームを作り、取り組んでいきたい。

また、まちづくりに関わってきた諸団体があるため、それらの団体も交えて「市庁舎でなにをするか」という議論をしていく必要性を感じている。

きぼ一⁴の中にも大きなアトリウムがある。きぼ一建設当初はあまり使われていなかったが、色々な意見やご指摘をいただき、今では様々なイベントが開催されるようになってきた。このような例を参考にしながら、新庁舎の1・2階の使い方について、知恵を働かせて検討していきたい。

次に、時代と共に公共建築に求められるものはどのように変化していると感じているか。

山田会長： 昨今は台風や地震、そして集中豪雨が毎年発生しており、気候そのものが変わってしまった。古い建物を持ち続けること自体が不作為であるということを指摘する学者もいる。千葉市が通常時にも非常時にも機能する庁舎を模索していることは、時宜を得たものだと感じる。

千葉市庁舎はインフラ関連企業と情報のやり取りをし、その情報を市民に発信するシステムを構築することができる環境にある。市側でこの構築ができれば、日本トップクラス

³長岡市…市役所と同じ敷地内にアリーナや屋根付き広場（「ナカドマ」）を擁し、市民交流の拠点となっている。

⁴きぼ一…千葉市中央区にある、公共施設と商業施設が入居する官民複合施設。子育て支援と生活・産業の情報発信の拠点として、千葉市科学館、子育て支援館、ビジネス支援センターなどが入居。

の（防災）庁舎になり得る。

建物本体に言及すると、高層棟はなるべく天井を張らず、空調は床下吹き出し式を採用した。この設計であれば天井から重い物が落ちてくるということは、まず生じない。ここまで非常時に気を使った庁舎はなかなかないのではないか。一方で、柱の間隔を約1.6mと一般的なものより2倍近く広くするなど、どんな組織改正が生じてもフレキシブルに間取りを変更でき、経済的な庁舎だといえる。

今から竣工を楽しみにしている。素晴らしい庁舎を作っていただきたい。

熊谷市長： 行政の本庁舎に対する国民の見方は変化しているように感じる。以前は、行政の建物の優先度は低いという考え方がベースにあり、贅沢なつくりは良くない、という批判を浴びる時代もあった。

しかし、東日本大震災や熊本大震災といった幾度の災害を経て、「職員を守る」ということが「市民を守る」ということである、という考え方が浮上してきた。

千葉市の場合、東日本大震災から少し遅れて建替えの検討を始めたため、他の市庁舎の建替え先行事例を見ながら進められる環境にある。

今日の午前中に市民との対話会があり、その際に、ある市民からも「職員の働く環境は最終的には市民に直結するので、しっかり整備をすすめてほしい」という言葉をいただいた。今後もしっかりと検討を進めていきたい。

以前、雑誌のコラムで、隈教授が「最近の公共建築は法律重視で、どこにでもあるような真四角の建物が増えてきた。」と述べられているのを拝見した。街並みやまちづくりの観点から、公共建築を扱う行政や議会、そして市民に期待しているところ、理解してほしい部分について解説願いたい。

隈教授： 1980年代から世界は大きく変わった。ひとつめはコストに関する見方が厳しくなった、ということ。維持管理コストを含めて非常に厳しい。

同時に、コミュニティの中心が欲しい、という風潮も強くなっている。インターネット上で人が結び付くだけでなく、「ここが街の中心だ」と思える実際の空間、広場などを求める声が大きくなっている。単なる役所機能だけではなく、「コミュニティの中心」としての機能をもつ庁舎のことをヨーロッパでは「シティホール」と呼んでいるが、それを求める傾向が高まっているのである。

そこで1・2階のつくりが重要となってくる。他の自治体においても、どのように人を集めてイベントを開催するか、という関心が高まっており、わたし自身、設計者として模型を前に話す機会も多くなった。

今回のプロジェクトは、世界の最先端に立てるプロジェクトだと感じている。コストを安く抑え、なおかつコミュニティの中心になるように、デザインの力で解決しなければいけないと考えている。

熊谷市長： デザインの力という話が出た。単なるデザインだけでなく、コンセプトを含めてデザインする時代に突入しているように感じている。市役所がまち全体のデザインに波及効果をもたらすようハードとソフトの両面で機能を発揮することがまちづくりの中で求められていると感じる。

千葉市には、市民のために活動するコミュニティが数多く存在するため、新庁舎整備を契機にその活動が広がるよう、我々も取り組んでいきたい。そして、竣工後の運用の検討について市民の皆様にも積極的に参加していただきたい。

本市の庁舎整備はタイミングとしてちょうど良いと感じている。先ほど申し上げたとおり、東日本大震災後にいくつかの市が検討した後のスタートであり、そして熊本地震後には国が庁舎建て替えに対して支援を行うという発表をし、万全の体制と言える。

さて、山田会長と隈教授には1年の間に2回も登壇いただき感謝申し上げたい。

最後に一言ずつコメントをいただきたい。

山田会長： 弊社では現在、他都市の庁舎設計に携わっている。防災と市民サービスの両立を考えている。千葉市庁舎が竣工した時には防災庁舎かつ市民のコミュニティ中心であり、海と街をつなぐ庁舎として首都圏の庁舎の金字塔となるのではないかと感じる。

隈教授： 千葉市は色々な可能性があると感じている。「まち」と「みなと」をどうつなぐか、が大きな課題である。バルセロナはオリンピック開催を契機に、「まち」と「みなと」をつなぐ取り組みを行い、街のイメージが一変した。経済が上向き、大化けした。

日本の都市について言及すると、東京や横浜の臨海部は、その整備や検討により、海と陸の距離が広がったり、エリアが複雑化したりしているように感じられる。

一方、千葉市は陸と海がつながっており、これらの都市とは異なる方向性を模索できる。

今後、行政と市民とが一体となり、新しい千葉市をつくってほしい。

熊谷市長： 改めて千葉市の新庁舎にかけた思いをお聞きすることができた。ありがとうございました。

質疑応答

柳澤氏 : 第1部終了後に、質問用紙を回収・集計したところ46名の方から質問をいただいた。すべての質問についてこの場で回答することは難しいので3問程度に絞って質問させていただきます。

まず熊谷市長にお尋ねしたい。「市庁舎は執務がメインの場所であるため、職員の『働き方改革』についての考えを聞かせてほしい。」とのことだ。「働き方改革」については、検討委員会でも働き手に対していかに労働環境を整備するか、ワークスペースのあり方などについても議論してきたテーマである。

熊谷市長 : 現庁舎は執務室が細かく壁で区切られていることから、他部署との連携もなかなか難しい状況である。今回の基本設計では柱の間隔を広くとり、1カ所の大きなスペースに入居する部局が多くなり、チームを柔軟に変えることが可能な設計だと感じている。

繁忙期は部署によって異なるため、チームの中でうまく人を動かしたり、ミッションによって部署編成ができるようにしたりするなど、柔軟な働き方を考えていきたい。

また、庁舎の竣工と共に「働き方改革」も完成できるよう取り組んでいきたい。

柳澤氏 : 続いての質問は久米設計の山田会長にお願いしたい。「庁舎の効率的運営や省エネ化を図るためにはデータの見える化が重要。それに関する考え方を教えてほしい。」とのことだ。

第1部でも維持管理コストについての話もあったが、どれくらい省エネしているか外に見えるようにしていく重要性を感じる。山田会長から、自然エネルギーに対する考えを含めてお示し願いたい。

伊藤氏 : 山田に代わって、私から回答させていただく。「見える化」について、機械設備をどのように使っているか—例えば太陽光発電がどれくらい発電しているか、あるいは空調がどれくらい効率的に効いているか—という情報をストックして、翌年のエネルギーの使い方を考えていくことが可能である。

また、ストックしておくだけでなく、1・2階の吹き抜け空間にあるモニターなどを用いてそれらの情報を市民の皆さんに発信することもできる。

柳澤氏 : 続いて、「基本設計における隈先生ならではの工夫や発想があれば教えてほしい。」という質問が来ている。何度か例として示された長岡市役所で言えば、ナカドマというコミュニティスペースがあるが、千葉市庁舎で特筆すべき点があれば一言お願いしたい。

隈教授 : 1・2階における2層吹き抜けの市民ヴォイド空間である。第1部で菅野委員から「明るい印象を抱く。」という声をいただき、うれしく思った。1・2階は明るくて暖かい雰囲気演出するため、天然の木を用いることを心がけた。

「お役所らしい」というと、一般的にネガティブな印象を与えがちである。お役所が暖かく、訪れたい場所にするためにはどうすればいいか、ということを中心に考えていた。

それに加えて庇の存在も重要視した。また、軸の交差点にはまちかど広場を計画し、雨や日差しを防ぐ庇を象徴的に設けた。

柳澤氏 : 最後に、市長に新庁舎整備方針の決定、今後の進め方について質問があったので情報をお願いしたい。

熊谷市長： 我々は丁寧にプロセスを踏む必要がある。基本設計を受けて議会の意見をいただきながら、「建替える」という方針決定をする必要がある。その後実施設計、そして着工という流れだ。実施設計と着工についてはどの事業手法を選択して進めていくか検討する必要がある。財政的な見地から、どの手法が最もコストが安く、なおかつスピード感があるのか、比較検討し、事業手法を決定していく。その上で関連予算を算出し、議会の承認を得て次のステップに進むことになる。

基本設計を終えたといっても、これからまだ多くの時間を要する。災害に強い庁舎をいち早く建てるため、議会や市民の皆さんにスピード感を持って説明をし事業を進めていきたい。

柳澤氏： ありがとうございます。これにて質疑応答を終了します。